

# 「世界史上のシルクロードと唐帝国」

第4回全国高等学校歴史教育研究会 「阪大史学の挑戦」

於 大阪大学附属図書館 2006年8月1日

大阪大学大学院文学研究科教授・博士 森安孝夫

## 0. 導入

### 1) シルクロードと唐帝国に惹かれる日本人

唐の仏教王国としての側面

仏教文化 長安・洛陽などから博多・大阪・奈良・京都へ

玄奘・義浄・・・教学仏教

善導<sup>ぜんどう</sup>・・・浄土教

不空<sup>ふくう</sup>・・・密教

東アジア文化圏の形成 漢字と律令制と仏教文化

百済・新羅・渤海・日本・安南

### 2) 花の都と科擧より現代歴史学の意義に及ぶ

初唐の張説<sup>ちやうえつ</sup>・陳子昂<sup>ちんすごう</sup>

盛唐の杜甫・王維・孟浩然<sup>もうこうねん</sup>

(詩仙と呼ばれて超俗の感ある李白でさえも)

中唐の白樂天(白居易)・元稹<sup>げんしん</sup>・韓愈・柳宗元

晩唐の杜牧・李商隱・韋莊

### 8世紀のユーラシア情勢

[地図 No. 2 参照]

現在に繋がる5つの文明圏(国家と宗教と文字に着目)の基礎が成立

フランク 遊牧騎馬民族とシルクロードの世界(突厥～回鶻) 渤海

王国 ビザンツ ウマイヤ朝 吐蕃 唐 新羅 日本  
帝国 ～アッバース朝 インド

西欧文化圏 / 東欧文化圏 / 西アジア文化圏 / 南アジア文化圏 / 東アジア文化圏

キリスト教	イスラム教	仏	教
ローマ教会	正教会	ヒンドゥー教	道教(アナー=仏教)
(聖像崇拜)	(聖像禁止)	(アナー=仏教, アナー=イスラム)	
(ローマ字)	(キリル文字)	(アラビア文字)	(インド系文字)
			(漢字)

\* 俗的権力と結び付いて国家形成ないし鎮護国家に役立った聖的権威としての宗教

\* イスラムのインパクト・・・キリスト教のヨーロッパを生み出す

# 1. 世界史の構想

## 1) 発想の転換（中央ユーラシアからの視角）

地図 No.1 「中央ユーラシアと四大文明圏と西欧の位置関係」 参照

中央ユーラシア：ユーラシア大陸の真ん中、すなわち中国西北部からモンゴル・チベットを含む中央アジア、そして東ヨーロッパあたりまでを中央ユーラシアと呼ぶ。草原と砂漠・オアシスの優越する世界。

遊牧騎馬民族とオアシス商人

遠隔地貿易（シルクロードとキャラヴァン）

→物・カネ（馬・絹・金銀・香葉・毛皮）・情報の移動

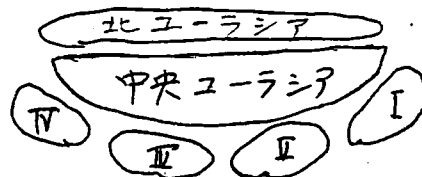
人（商人・騎士・奴隷・伝道者・スパイ）の移動→文化交流（とくに言語と宗教）

中央ユーラシアの世界史的意義

強大なパワーを持つ騎馬遊牧民の供給源———軍事的優位

諸世界（文明圏）を結ぶ大動脈———経済的優位

中央ユーラシア優位の時代（約2500年間）



- I 東アジア
- II 南アジア
- III 西アジア～北アフリカ
- IV ヨーロッパ

前近代におけるユーラシア世界史は、農業生産力だけでなく、馬の軍事力・情報伝達能力とシルロード商業による経済力をそれ相応に評価してこそ、はじめて理解可能となる。

## 2) 世界史の8段階（長期波動）

\*経済力（食料生産力と商工業とエネルギー）、軍事力、情報収集伝達能力に着目

- |                     |             |
|---------------------|-------------|
| 1) 農業革命（第一次農業革命）    | 約 11000年前より |
| 2) 四大文明の登場（第二次農業革命） | 約 5500年前より  |
| *西アジアでの車輪の発明もこれに続く。 |             |
| 3) 鉄器革命（遅れて第三次農業革命） | 約 4000年前より  |
| *恐らく戦車の登場もこれと関わる。   |             |
| 4) 遊牧騎馬民族の登場        | 約 3000年前より  |
| 5) 中央ユーラシア型国家優勢時代   | 約 1000年前より  |
| 6) 火薬革命と海路によるグローバル化 | 約 500年前より   |
| 7) 産業革命と鉄道（外燃機関）    | 約 200年前より   |
| 8) 自動車と航空機（内燃機関）    | 約 100年前より   |

1) 農業革命（第一次農業革命）・・・約11000年前より

農耕・牧畜の開始（採集経済から生産経済へ移行）

ユーラシア全体に伝播、始めは小型家畜のみ

2) 四大文明の登場（第二次農業革命）・・・約5500年前より

灌漑による穀物の大量生産、さらなる人口爆発

都市国家、祭政一致→文字の発明（独自）

車輪の発明（西アジアより伝播）

金属器革命（銅器・青銅器がないところもある）

戦車（馬車）の登場・・・ユーラシア草原で家畜化された馬と合体

以後、文明は膨大な木材を消費（建材、船、冶金、炊事、暖房）

3) 鉄器革命・・・約4000年前

西アジアのヒッタイトにて。ただし西アジアに鉄器が普及するのは紀元前1000年以後であり、中国でも戦国時代に入ってから。

#### 鉄製の武器と農機具

鉄製武器の圧倒的優位と天水農耕による耕地拡大

- 4) 遊牧騎馬民族の登場・・・約3000年前より  
戦車をはるかに凌ぐ機動力（地形にも無関係、スピードも増す）  
軍事力の強大化、情報伝達のスピード=アップ  
草原では馬は育つが、人口増加はさほど望めない  
農耕民族対遊牧騎馬民族という南北の緊張関係
- 5) 中央ユーラシア型国家優勢時代・・・約1000年前  
中央ユーラシア型国家：いわゆる「征服王朝」を拡大して定義するもの。遊牧騎馬民が主人公となり、農耕民・都市民を押さえて成立する国家。
- 6) 火薬革命と海路によるグローバル化・・・約500年前  
鉄砲・大砲の登場、羅針盤（外洋航海術）  
遊牧騎馬民族の軍事的優位の終焉  
海洋時代、旧大陸のグローバル化が新大陸にまで拡大
- 7-8) 産業革命以後・・・約200年前  
軽工業より重工業へ、蒸気機関と鉄道  
動力革命と交通・情報革命（石炭・石油・電気・原子力へ）  
軍事力は戦車・戦艦より戦闘機・ミサイル・核爆弾へ

## II. 遊牧騎馬民族の登場と世界史

### ●遊牧騎馬民族登場以前の中央ユーラシア

- ①馬の家畜化 中央ユーラシア原産の馬、紀元前4000～3000年頃
- ②戦車の登場 紀元前二千年紀 （馬車から二輪戦車へ）

### ●遊牧騎馬民族登場以後の中央ユーラシア

- ③遊牧騎馬民族の登場 紀元前1000年頃より  
西のスキタイ、東の匈奴 抜群の機動力・軍事力
- ④4～5世紀の民族大移動  
ユーラシア東部の五胡十六国・・・匈奴・鮮卑・氐<sup>てい</sup>・羌<sup>きやう</sup>・羯<sup>けつ</sup>  
（鮮卑系の）北魏、東魏、西魏、北周、北齊、隋、唐  
ユーラシア西部のゲルマン民族の大移動・・・匈奴からフンへ
- ⑤系統不明のエフタル・・・かつてのクシャン帝国の領域と重なるトルコ系諸民族の活躍・・・突厥・ウイグル・カルルク・オグズ
- ⑥中央ユーラシア型（征服王朝型）国家の成長発展期

ユーラシア史の一大転換期は10世紀前後=9～11世紀 [地図 No. 2 -⑥参照]

東から順に遼朝（モンゴル系契丹）、

沙陀諸王朝（五代のうち後唐・後晋・後漢の3王朝はトルコ系）、

西夏王国（タンゲート）、甘州ウイグル王国、西ウイグル王国、

カラハン朝、ガズナ朝、セルジューク朝、ハザール汗国などの並立

続く12世紀

金朝（満洲ツングース系）、西遼、ゴール朝、ホラズム朝、

ルーム=セルジューク朝

⑦13世紀のモンゴル帝国（元朝）・・・中央ユーラシア型国家の完成

⑧中央ユーラシア型国家の遺産（モンゴル継承国家）

[ロシア]、オスマン朝、ティムール朝、サファヴィー朝、ムガル朝、  
清朝（満洲ツングース系） [地図 No. 2 - ⑧参照]

\* 中国歴代諸王朝の半分（太字）は非漢人系！

\*\* トルコ系にはアンダーラインあり。

### III. 前近代ユーラシア史におけるシルクロードの重要性

#### 1) シルクロードは3本の道ではない

天山北路・天山南路北道（西域北道）・天山南路南道（西域南道）  
草原の道・オアシスの道・海の道

シルクロードとはネットワークである [地図 No. 3 参照]

見取図の出典：森安孝夫「世界史の中の異文化交流」 柏木隆雄・山口修（共編）「異文化の交流」 大阪大学出版会、1996, pp. 87-107.

#### 2) 近現代中央アジア史研究者のシルクロード批判への反批判

×中央アジア史にとってシルクロードは重要ではないという議論

×シルクロードとは草原の道であるという恣意的解釈の愚

×イスラム化を強調しすぎて、時代区分がおかしくなる

×イスラム化を強調しすぎて、中央アジアからモンゴルとチベットを締め出す

#### 3) シルクロードの本質は奢侈品の中継貿易である

ラクダや馬で運ばれた奢侈品

東の中国から：絹織物・紙・茶

西のペルシア・東地中海方面から：金銀器・ガラス製品・乳香・薬品・絨毯

南のインド・東南アジアから：胡椒・香木・宝石・珊瑚・象牙・犀角・鼈甲・藍

北のロシア・シベリア・満洲から：高級毛皮・朝鮮人参・鹿角・魚膠

中央アジア自身から：コータンの玉、バダクシャンのラピスラズリ、クチャの磁砂のうしや、チベットの麝香じやくやヤク牛の尻尾

特産地が複数：毛織物・綿織物・真珠・装身具、鎖帷子・装飾鞍などの武具、ワイン・蜂蜜・大黄など

自分で動く高額商品としての奴隷と大型家畜（馬・ラクダなど）も重要！

### IV. 唐代の胡姫とソグド文女奴隷売買契約文書

#### 1) 唐代の胡俗の大流行

胡服・胡帽・胡食・胡楽・胡粧

「太常の楽<sup>がく</sup>は胡曲を尚<sup>とう</sup>とび、貴人の御饌<sup>ぎよい</sup>（美食）には尽く胡食を供し、士女は皆競って胡服を衣<sup>きる</sup>る。」  
【旧唐書】卷四五・輿服志

「天宝（西暦七四二～七五六年）の初め、貴遊・士庶は好んで胡服を衣て豹皮の帽をなし、婦人は即ち歩搖<sup>ほよう</sup>（歩くと揺れて輝く頭飾）を簪<sup>かんざし</sup>にして、衣服の制度は襟<sup>えり</sup>袖<sup>そで</sup>とも窄<sup>せまく</sup>小なり。識者は竊<sup>ひそ</sup>かに之を怪しみて、その戎<sup>えび</sup>すたるを知る。」  
【安祿山事跡】卷下

## 2) 酒場の胡姫

李白「少年の行<sup>う</sup>た」

五陵<sup>ごりょう</sup>の年少 金市の東<sup>ひんがし</sup>、  
銀鞍<sup>ぎんあん</sup> 白馬 春風を度<sup>わた</sup>る。  
落花<sup>らつか</sup>踏み尽くして 何<sup>い</sup>づれの処<sup>ところ</sup>にか遊ぶ、  
笑って入る 胡姫<sup>こき</sup>酒肆<sup>しゅうし</sup>の中。

(現代語訳)

郊外の高級住宅地に住む青年たちは、長安の西バザールの東隣にある繁華街を、銀板で飾った鞍を載せた白馬にまたがって、春風に吹かれながら颯爽と行く。一面に散った花を踏みながら、どこへ遊びに出かけるのだろうか。笑いさざめきながら繰りこんだのは、美しい胡姫のいる酒場の中だ。

李白「白鼻の騮」

銀鞍 白鼻の騮<sup>(か; 特異な黄馬の一種)</sup>、  
緑地 障泥<sup>しょうでい</sup>の錦。  
細雨 春風 花落つる時、  
鞭を揮<sup>ふる</sup>いて直<sup>ただ</sup>ちに胡姫に就きて飲む。

(現代語訳)

銀板で飾った鞍を白い鼻面の黄馬に置き、地色が緑の泥よけ（障泥）用の腹掛けを錦で飾っている。細かい雨が降り、春風が吹いて、花が散る時分、馬に鞭をふるい、一直線におめあての胡姫のいる酒場に入って飲み始める。

## 3) ソグド文女奴隷売買契約文書

1969年、トゥルファン盆地アスターナの古代墓地より出土（漢文書と併出、埋納品） 新疆ウイグル自治区博物館に陳列

1987年、森安が調査・筆写

1988年、吉田豊氏と共に解説・再調査：

吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館「魏氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」  
【内陸アジア言語の研究】4、1989、pp. 1-50.

女奴隷売買契約文書の最新和訳

[写真を掲載 No. 5]

[表面]

歳は、高昌の（元号）延寿、神なる大イルテベル王の一六年であった。豚の年で、漢語では五月、ソグド語ではクシムサフィッチ（＝一二番目の月名）と呼ばれる月の二七日に。

かくして高昌の市場で、人々の前で、チャン姓のオタの息子である沙門ヤンシャンが、サマルカンド出身のトゥザックの息子であるワクシュヴィルトから、チュヤック姓の女でトルキスタン生まれのオパチという名の女奴隷を、とても純度の高い（ササン朝）ペルシア製の一二〇（枚の）ドラクマ（銀貨）で買った。

（買い主）沙門ヤンシャンは、この女奴隷オパチを以下のようなものとして購入することとする：（売り主は）買い戻しをせず、（オパチの身には）負債も財産もなく、（第三者からは）追奪ついでされることなく、（所有権をめぐる）訴訟されることなく、子々孫々（に及ぶ）永久財産として。それゆえに沙門ヤンシャン自身とその子々孫々は、彼女を好きなように打ったり、酷使したり、縛ったり、売りとばしたり、人質としたり、贈り物として与えるなり、何でもしたいようにしてもよい。まさしく父祖伝来の遺産や、自家の身内で生まれた固有の（？）女奴隷や、ドラクマ（銀貨）で買われた永久財産に（対する）ように。

この女奴隷オパチについて、（売り主）ワクシュヴィルトは（もはや）関わりなく、すべての旧い（権利）から離れ、強制力を持たなくなった。この女奴隷文書は、王であれ、大臣であれ、すべての人々に対して効力があり、権威がある。この女奴隷文書を携え保持する者は誰であれ、この女奴隷オパチを受領し、連行し、女奴隷として保持してかまわない。以上のような、女奴隷文書中に書かれたような条件で。

そこに（立会人として、以下の人々が）いた：マーイムルグ（米国）出身のチュザックの息子ティシュラート、サマルカンド（康国）出身のクワタウチの息子ナムザール、ヌーチカンス（ヌッチケント＝笈赤建）出身のカルズの息子ピサック、クシャーニヤ（何国）出身のナナイクッチの息子ニザート。

この女奴隷文書は、書記長パトールの認可のもと、ワクシュヴィルトの依頼により、オパチの同意をもって、パトールの息子オクワンによって書かれた。

高昌の書記長パトールの印記。

## [裏面]

### 沙門ヤンシャンの女 [奴隷売買契約文書]

年代決定した考証の過程：

- ① 高昌=cyn'ncknδ「チナ人の都城」とは Qocho 高昌故城を指す（出土地と一致）  
漢代からの漢人植民地 麹きう氏高昌国（498～640年） 唐の西州  
漢人、トカラ人、ソグド人、トルコ人など 漢人中心王朝
- ② イルテベル='yrtp'yr --- 古代トルコ語 iltäbär と推定（rとlの違いは問題なし）  
イルテベルとは：
  - ・ 6世紀以降、中央アジアを支配したトルコ系騎馬遊牧民国家（突厥、鉄勒など）の君主「可汗」が、服属した他の遊牧部族集団の長やオアシス都市国家（トゥルファン、タリム盆地、ソグディアナ）の王に与えた称号。
  - ・ 漢籍（典籍）史料では希利發、頡利發、頡利吐發、俟利發、意利發など。

・トゥルファン出土漢文文書に高昌国王が突厥の称号「希利發」を持つ史料あり。 第6代 魏宝茂； 第7代 魏乾固

### ③「大イルテベル王の16年」で「豚の年」

魏氏高昌国王の在位年数 16年以上は第1、3、7、8、9代

年号 16年以上は第3、7、9代

y'ncyw -- 第9代 魏文泰の年号「延寿」(中古音 \*iän ziau)

延寿16年 = 己亥年 = AD. 639年と年代確定

## V. ソグド人東方発展史研究の新動向

### 1) 商人のみならず武人・外交官・政治家として活躍するソグド人

227年、蜀と呉が連携して魏を挟み撃ちにしようと計った時、  
諸葛孔明が蜀の大軍を率いて北上、劉備の後嗣の劉禪が詔勅を下す

「涼州(ここでは広義の涼州で河西地方全体を指す)の諸国王は、各々月支や康居の胡侯ここうである支富や康植など二十余人を遣わし、詣いたりて(蜀皇帝・劉禪ひいては諸葛孔明の)節度を受けることになっている。大軍(蜀軍)が北へ出発すれば、すなわち彼らは兵馬を統率して(援軍として加わり)、(戦鬪が始まれば)戈ほこを奮って先駆しようと望んでいる。」

【三国志】卷三三・蜀書・後主伝&【冊府元龜】卷二一七

### 2) 虞弘墓発見の衝撃

【虞弘墓の図版 No. 6 & 7】

1999年、山西省の太原で発見

祖父は「魚国の領民酋長」

父は魚国から茹茹じょじょ(=柔然)国に入り、莫賀去汾・達官タルカンという官職に就いただけでなく、使節として北魏に来た経歴

虞弘自身は13歳の若さで柔然の莫賀弗バグフル(官職)に任じられ、君命を奉じてペルシアや吐谷渾国へ使いした。その後、莫縁ばくえん(官職)となって柔然の使者として北齊に派遣された時(554年頃)、両国の関係悪化によりそのまま抑留され、以後、北齊・北周・隋に仕える。

北周時代には、ソグド人の軍事的側面を明示する証拠として、山西の重要拠点である并州・代州・介州という「三州の郷団を領し」て「薩保府を檢校」している。

\*薩保=薩宝「キャラヴァン=リーダー」ソグド人植民聚落のトップの称号

虞弘は柔然と北中国を股に掛けて活躍したソグド人

酒泉にあったプハラ出身安氏集団のリーダー安吐根の活躍とオーバーラップ

#### ◎安吐根

曾祖父の時代から酒泉に住み着いた「商胡」

北魏末、北魏の国使として蠕蠕じゅじゅ(=柔然じゅうぜん=茹茹じょじょ)に派遣

柔然可汗・阿那瓌あなかい(在位520-552年)のもとで文書行政

534年、阿那瓌が北魏最末期の混乱に乗じて侵攻する意図

使者を北魏に派遣、

安吐根は柔然の北魏侵攻計画を北魏の実力者・高歓に密通  
535年、北魏が東魏・西魏に分裂し、柔然の方が外向的に優位  
安吐根は自分の本拠のある河西に近い西魏ではなく、遠方の東魏と通交  
分裂直後は、高歓が事実上の支配者となった東魏が西魏を圧倒  
東魏と柔然が婚姻によって和親するのに尽力 541年に成功  
最終的には東魏に帰伏 親密となっていた高歓およびその後継者の恩顧  
550年、東魏から北齊に世が替わった後、仮節涼州刺史や開府儀同三司

後藤勝「西域胡安氏の活動と漢化過程」『岐阜県高等学校社会科研究会研究彙報』7 pp. 36-54 1968年；「ソグド系帰化人何氏について——西域帰化人研究 その2——」『岐阜教育大学紀要』14 pp. 1-20 1987年；「ソグド系帰化人安吐根について——西域帰化人研究 その3——」『岐阜教育大学紀要』16 pp. 21-30 1988年；「東魏・北齊朝の西域人——西域帰化人研究 その4——」『岐阜教育大学紀要』19 pp. 47-64 1990年

### 3) ソグド人と唐建国をめぐる新説

隋末の617年7月、太原で李淵が蜂起

弟・安修仁、隋の大業13年（617年）、他の胡人・漢人らとともに涼州（武威）に李軌政権を擁立

兄・安興貴、長安に赴いて新たに樹立された唐王朝に仕えており、情勢を見て、李軌を唐朝に帰属させるための任務を帯びて涼州に戻ることを高祖・李淵に上奏。

李軌は唐に投降することを拒んだので、安興貴・安修仁の兄弟はソグド人をはじめとする胡人集団を率いてクーデターを起こし、李軌を捕らえ、619年、河西の地を唐に献上。

涼州の安氏一族は、最初から群雄を両天秤にかけ、自家の安全保障を図る。

（後に安禄山が養子に入る安氏一族の場合にも、唐と突厥の両方に構成員を送り込んでいた事実と比較）

山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団——天理図書館蔵「文館詞林」「安修仁墓碑銘」残巻をめぐって——」『東方学』110 pp. 65-78 2005年

隋末唐初に安修仁が兄と共に李軌政権を傀儡としてその趨勢を左右できた背後には郷兵として組織されたソグド人軍団が存在した。

安興貴の息子である安元寿の墓誌

安元寿は16歳で李世民の秦王府に入り、「玄武門の変」やその直後の突厥・頡利可汗来襲の際にも李世民の傍らにあって活躍

安興貴はいわば太宗即位の立役者的存在

いったん官職を辞して故郷の涼州に帰り家業に従事

「李抱玉は武徳の功臣・安興貴の裔なり。代々河西に居り、善く名馬を養い、時の称する所と為る。」

『旧唐書』卷一三二・李抱玉伝



この軍人宰相・李抱玉の本名は安重璋

肅宗・代宗に仕えて安史の乱平定に功績を立て、757年に李姓を賜って改名。

河西回廊～寧夏～オルドス（黄河湾曲部）～山西北部の農業＝遊牧境界地帯 & 天山地方～モンゴリアの草原地帯に進出したソグド人

- ・ソグド人たちは、大量の馬を保持することによって、馬を商品とし、馬とラクダの機動力に頼る東西交易に従事する一方、騎馬を中心とする軍事力を兼ね備える武装集団となった。
- ・自らの組織するキャラヴァンを護衛。
- ・自らが将来性を見込んだ相手に対しては、たとえそれがトルコ系遊牧集団であろうが漢人軍閥であろうが、積極的に軍事力を提供しつつ、共に発展しようと図る。

## VI. 唐の本質は拓跋国家である

### 1) 多民族国家としての唐

not 漢人王朝 but 唐人王朝 「漢化」・・・後知恵の中華思想  
異民族王朝だから異民族を重用するのは当たり前（国際的・開放的）  
遊牧騎馬民族の軍事力 + ソグド人の経済力

北魏・東魏・西魏・北周・北齊・隋・唐・・・鮮卑系王朝、「拓跋国家」

### 2) 唐建国の担い手

陳寅恪に始まる関隴集団説

北魏が北方防衛のために配置した六つの辺境軍鎮「六鎮りくちん」  
武川鎮ぶせんちん・・・内モンゴル自治区の首都・呼和浩特フフホトの北方  
六鎮の乱と北魏滅亡

多数派は東魏へ 武川鎮出身者を中核とする少数派は西魏へ  
関中盆地で郷兵集団を統率していた在地豪族と手を組ぶ  
胡漢融合集団である関隴集団

それを基盤にして北周の宇文氏、隋の楊氏、唐の李氏が相次いで政権

石見清裕の発見 石見清裕「唐の北方問題と国際秩序」汲古書院 1998年  
オルドス（黄河湾曲部）で遊牧生活を続けていた匈奴の費也頭ひやとうという集団

楊堅・楊広すなわち隋の文帝・煬帝二代にわたる新国家建設の一大事業

隋末の全国の反乱勢力は約二〇の群雄に集約

煬帝から太原留守という大役を任されていた李淵と有能な三人の息子  
617年7月に挙兵・・・本拠が山西省の太原（并州、晋陽）

617年11月、李淵軍が長安に入城 煬帝の孫の楊侗ようゆうを傀儡、自分は唐王に

618年3月、煬帝が江都揚州で部下の反乱にあって殺される

618年5月、李淵は初代皇帝・高祖 武徳元年の唐建国

長男・李建成が皇太子、次男・李世民は秦王、四男・李元吉は齊王

各地にはまだ多くの群雄が残る（真の統一は5年後の623年）

619年に関中を12ブロックに分ける軍管区制として設置された関中十二軍  
李世民の際だった軍事的活躍

### 3) 拓跋国家と突厥第一帝国

唐が中華の唐帝国を確立するために最大のライバル＝突厥第一帝国（東西両突厥）

突厥第一帝国・第三代・木杆<sup>もつかん</sup>可汗

「以来、突厥は富強となり、中華を凌ごうという意志を抱くようになった。北周の武帝（高祖、宇文邕<sup>よう</sup>）は木杆可汗の娘を娶る競争において北齊に勝利し、北周の朝廷はすでに突厥と和親して、毎年、繪<sup>きぬ</sup>・絮<sup>きぬわた</sup>・錦<sup>にしき</sup>・綵<sup>あやぎぬ</sup>という多種多様の絹製品一〇万段を贈っていた。突厥人で京師（長安）に滞在する者は丁重にもてなされたので、錦を衣服とし肉を食している者は、常に千をもって数えるほどたくさんいた。一方、北齊の人もその侵略を懼れ、やはり宮廷や国家の財物庫を傾けて贈り物をした。」 【周書】突厥伝

突厥第一帝国・第四代・他鉢<sup>たつぱる</sup>（佗鉢）可汗

「南方にいる二人の息子（北齊と北周）が孝順であるかぎり、我らにどうして物資欠乏の心配があろうか。」 【周書】突厥伝

### 4) 唐草創期の突厥優位

隋末の群雄割拠

薛挙<sup>せつきよ</sup>・竇建徳<sup>とうけんたく</sup>・王世充<sup>おうせいじゅう</sup>・劉武周<sup>りゅうぶしゅう</sup>・梁師都<sup>りょうしと</sup>・李軌<sup>りき</sup>・高開道<sup>こうかいどう</sup>らが次々に皇帝号を僭称  
いずれも突厥に対しては「北面して臣と称し、その可汗号を受けた」

李淵・李世民父子も617年の太原挙兵に先立ち、突厥に誼を通じる

突厥より李淵側に1000匹の馬と2000人の騎兵

（一説によれば500人の騎兵と2000匹の馬）を出し、目付を兼ねた援軍

現存史料で小可汗号を授与された群雄

薛挙・竇建徳・王世充・劉武周・梁師都・李軌・高開道

李淵は含まれていない・・・唐の第二代皇帝・太宗・李世民の時の歴史改竄

618年、李淵が長安で皇帝として即位した時、唐王朝は東突厥の臣属国

619年、大同盆地西部の馬邑から頭角を表した群雄の劉武周が唐創業の地である

太原を落とす。唐建国を助けた突厥は、自らが定楊可汗という小可汗号を授けた劉武周の側に付き唐に敵対・・・唐は建国後最大の危機

ところが処羅可汗は、隋・煬帝の嫡孫・楊正道の方が中国支配に役立つと考えたらしく、隋の反乱分子である劉武周討伐に方針転換

その背後事情：

劉武周は隋の反乱分子 妻の義城公主の意向

弟の歩利<sup>アリ</sup>設<sup>シャド</sup>を2000騎とともに派遣して、唐に味方

その後

食糧・馬糧調達と中国侵略の要である馬邑地方を獲得  
今度は唐と袂を分かち、いくつものルートから長安を攻撃する計画  
即位後一年余で急逝、唐との全面戦争の計画は中止

## 5) 玄武門の変による太宗の即位

李建成・李元吉 vs. 李世民 敵対の基本構図  
武徳六(623)年・・・残る群雄は2人、背後に強大な突厥  
梁師都(オルドスの夏州)、苑君璋(大同盆地の朔州=馬邑)  
武徳七(624)年  
突厥の頡利・突利両可汗の進撃に李世民が対抗  
武徳八(625)年・・・関中十二軍の再設置  
十二人の最高指揮官は高祖・李淵の配下のみ(安修仁はここにいる!)  
李世民派(山東集団)は締め出し  
武徳九(626)年六月四日、玄武門の変・・・長安城北門でのクーデタ  
房玄齢を筆頭とする山東集団の強力な支え  
唐建国の功臣としての名誉  
李淵の太原挙兵以来の元従から、李世民の配下へ移る。  
唐の名族を一覧する『貞観氏族志』は山東勢力優位

## 6) 唐の最盛期と天可汗という称号

630年、草原世界の諸民族の君長たちが太宗に「天可汗」という称号を奉った。  
農耕中国の天子たる「皇帝」  
北～西北方の草原世界の天子たる「天可汗」としても認知  
唐帝国は真の「世界帝国」に成長したというのは過大評価

突厥のオルホン碑文、ウイグル帝国のシネウス碑文など  
トルコ系諸民族が唐王朝・唐帝国のことをタブガチ(Tabyaç)と称した。  
拓の語末の-yと跋の語頭のb-が交代 音位転換

北魏以来隋唐までの拓跋国家の天子は、あくまで北方出身の「タブガチ可汗」  
そのようなタクバツ可汗に率いられた唐帝国が、  
軍事力によって突厥・鉄勒を包含するトルコ世界を制圧。

草原世界の諸君長が太宗に天可汗という尊称を奉るのはごく自然  
複数存在可能な小可汗の上に立つ大可汗 or 唯一至高の可汗

昭陵 太宗とその皇后長孫氏の合葬墓 西安の西北方向へ約60km  
九嶷山きゅうそうざんという自然の山そのものを利用

参考：中国の天子は日常的に玉座に座る時や儀礼の時などには南面  
高宗と則天武后を祀る乾陵けんりょうは南面  
昭陵 南側に門や献殿があり、多くの子や臣下の陪葬墓も全て山陵の南側

昭陵の重要な施設である北司馬門 山の北斜面中腹

六駿 太宗が唐建国のための軍事活動で苦勞を共にした6匹の愛馬の石像  
2体はアメリカ合衆国、4体は西安市内の碑林博物館に移管  
閻立德<sup>えんりつとく</sup>・閻立本<sup>えんりつほん</sup>兄弟の手になる見事な浮き彫り

#### 14人の蕃君長の石像

649年の太宗崩御後、阿史那<sup>あしな</sup>社爾<sup>しゃじら</sup>らの殉死を禁止した代わり  
ひどく破壊されており、一部が山麓の昭陵博物館に保管  
現地に残るのは銘文付きの台座七基のみ  
左右（東西）に半分ずつ列置

墓の本体は山の頂上付近 太宗は北面して14人の蕃君長に謁見する形

- 東側
- 1) 頡利可汗（阿史那咄苾<sup>とつひつ</sup>、東突厥最後の大可汗、634年死去）
  - 2) 突利可汗（阿史那什鉢苾<sup>じゅうはつひつ</sup>、631年死去）
  - 3) 阿史那思摩（647年死去）
  - 4) 阿史那社爾
  - 5) 新羅の女王・金真徳
  - 6) ベトナムの林邑王・範頭黎<sup>はんとうり</sup>
  - 7) インド王・阿那順
- 西側
- 1) 薛延陀の真珠毗伽<sup>びるげ</sup>可汗（夷男、645年死去）
  - 2) 吐谷渾の烏地也拔勒豆可汗（慕容<sup>はよう</sup>諾曷鉢<sup>だくかつはつ</sup>）
  - 3) チベット帝国（吐蕃）の初代贊府<sup>ツェンボソソ</sup>ツェン=ガンボ  
唐から文成公主を娶った人物
  - 4) 高昌王の麴智勇（漢籍には麴智盛と伝えられる）
  - 5) 焉耆王の龍突騎支
  - 6) 龜茲<sup>クチャ</sup>王の訶黎布失畢<sup>ハリブシユバ</sup>
  - 7) 于闐<sup>コータン</sup>王の伏闐<sup>ウイジャヤ</sup>信

#### 14人のうち7人まで

中国の北～西に雄飛した遊牧国家ないし半農半牧国家のリーダー  
新羅は高句麗の後継扱いだから北～西グループに含め流と8人  
4人が西域のオアシス都市国家の王  
残るは南の林邑とインドだけ  
北～西方のシルクロード地帯の存在意義の大きさ  
それらを制圧しての太宗の天可汗号獲得  
北司馬門に居並ぶ蕃国の君長に対しては北面するのが当然

昭陵は南面する中華の皇帝（天子）と、北面する天可汗との両方を象徴

昭陵には突厥的な雰囲気あり（葛承雍の説）

「山に依りて陵を為す」という中華の陵墓制度自体が

昭陵から始まったのは突厥の聖山信仰の影響。

六駿の顕彰 オルホン碑文で英雄の愛馬が活躍した様子を記すのと通じる。

六駿のうちのいくつかの名前は突厥語に由来。

群雄時代の李淵は突厥の大可汗である始畢から必ずや小可汗号を受けていたはず  
突厥・唐間の君臣関係でいえば、臣下の立場にあった李淵の地位  
後嗣の李世民がようやくここに至って逆転

太宗に草原の君長たちから天可汗号が贈られた真意は、実はその程度のもの！